



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スターンとワロンにみる乳幼児の他者体験と「自己」の形成：日常的なエピソードを通して
Author(s)	松井, 尚子; MATSUI, Naoko
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 98, 237-250
Issue Date	2006-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.98.237
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14439
Type	departmental bulletin paper
File Information	98_237-250.pdf



スターンとワロンにみる乳幼児の他者体験と 〔自己〕の形成

— 日常的なエピソードを通して —

松井尚子*

Stern and Wallon's Views on the Relationship with Others and 'Self' Formation in Infants with Reference to Episodes in Daily Life

Naoko MATSUI

【要旨】乳幼児の「自己」形成の問題は、他者との関係性をはじめとする、自己および他者表象など、発達上の根幹的な事柄を含む問題である。又この問題は、発達・療育相談の場においては極めて日常的な課題として立ち現れてくる。本論文では、ダニエル・スターン (Stern, D.) とアンリ・ワロン (Wallon, H.) の自己感、あるいは自我意識に関する論考を読み取りの手がかりとしながら、この問題への接近を試み、6ヶ月から3歳後半までの乳幼児の日常的なエピソードを「自己」意識の観点から検討し、日常場面の捉え直しを仮説的に提起した。最後に、スターンとワロンの論考を、乳児像の捉え方、関係性の捉え方、表象の問題の、3つの観点から比較検討した。

【キーワード】自己感、関係性、情動、自我・他者意識、表象

はじめに

乳児は誕生直後から、養育者を始めとする複数の大人に囲まれ、心身両面の世話を受けながら成長・発達する。幼児期においても、その特徴は基本的には変わらない。そのため乳幼児の発達のドラマは、その多くが大人との交流場面の中で展開されていくことになる。

子どもはどのように他者と交わり、「自己」を発達させていくのか。そこに大人はどのように関与しているのか。子どもの「自己」発達に関わるこれらの問いは、これまで担当してきた発達相談や療育相談の場で、折に触れ筆者自身が自問してきた問いであり、本論文の契機ともなった問いである。他者との交流が難しい子どもと、その子どもとの接点を見つけられずに立ち往生する養育者からの相談は、乳幼児の育ちの根幹に関わる「自己」と他者との関係性の問題のみならず、表象の形成にも連なる発達上の諸問題を含んでいたからである。そして本論文で取り上げる乳幼児期の「自己」発達に関する二つの論考は、それらの問いに対して深い示唆を与えるものである。しかし、それらの論考が、子どもたちのどのような様子や姿を説明するもの

* 北海道大学大学院教育学研究科教育臨床講座博士後期課程 (乳幼児発達論研究グループ)

なのかを具体的に問う作業を経ない限り、優れた論考も日常生活に還元されるものとはなっていない。かかる観点から本論文は、「自己」発達に関する二つの論考を基に、子どもの日常的な情景（エピソード）を素材として、乳幼児期の自己発達と他者関与の意味を考え、その上で日常場面の捉え直しを仮説的に提起することを目的としている。

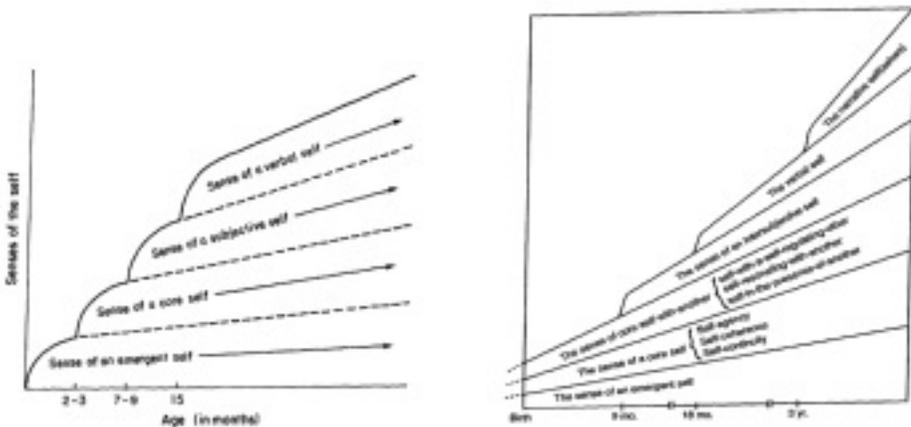
本論文で取り上げた論考は、子どもの自己感の発達あるいは自我意識の発生に深い示唆を残しているダニエル・スターン（Stern, D.）とアンリ・ワロン（Wallon, H.）の論考である。スターンは他者との関係性を自己感創出の前提とし、その点においてワロンの論考に重なる部分が少なくない。一方、子どもは本来「社会的な存在」として生まれ、成長・発達を遂げながら徐々に「個としての人格」を備えていくとするワロンは、情動と深く関わりながら進行する子どもの自我意識の足取りとその深化を詳細に論じ⁽²⁾、今日なお、発達障害を持つ子どもの臨床現場に貴重な示唆を与えている⁽³⁾。

本稿では、I-1でスターンの論考の大まかなトレースを試み、I-2でワロンの論考を2つの論点から概観する。IIで、乳児期から3歳後半までの自我意識に関わる具体的なエピソードを考察し、日常場面の捉え直しを仮説的に提起する。IIIでは、本稿で取り上げたスターンとワロンの論考の類似点と相違点を中心に考察する。

I 自己感あるいは自我発達に関する二つの論考を概観する

1. スターンのいう自己感 — 関係の創出（creation of ties with others）モデル

スターンは、1970年代以降の乳幼児発達心理学諸研究の知見を視野に入れながら、誕生直後から言語の出現辺りまでの乳幼児の「自己感」（sense of self）の発達を論じている⁽¹⁾。それによると、誕生以後、乳児の自己感は新生自己感（sense of an emergent self）、中核自己感（sense of a core self）、間主観的自己感（sense of a subjective self [2000年度版では intersubjective]）、言語的自己感（sense of a verbal self）へと変化・発達する。新たに加筆された2000年版序章によると、最初の2つの自己感は誕生とともに（あるいは胎児期から）始まり、それらは平



〈1985年版〉

〈2000年版序章〉

図1

行しながら層として積み上がる。次の間主観的自己感とそれに続く言語的自己感、さらにナラティブ自己感はそれら2つの自己感に重なりながら発達する。つまり、スターンはそれらの自己感を階層モデル (layerd model) 構造を成すものとして説明している (図1参照)。新生自己感は、睡眠覚醒サイクルやホルモン環境の安定などの生理的な感覚と刺激の弁別能力が中心となる。それと並行して創出する中核自己感、他者からの関わりを受けて自己の身体が感知する自己—主体性 (self-agency — 行為者としての自己を感じる事。例えば自分が目を閉じると暗くなる事がわかるなど)、自己—一貫性 (self-coherence — 身体的に断片化していないと感じる事。例えば動いている時もじっとしている時も同じ自己である、という感覚があるなど) 自己—連続性 (self-continuity あるいは self-history — それまでの自己との持続感を感じる事)、そして自己—情動性 (self-affectivity — 自己体験に属する感情の特性を感じる事) といった、4つの自己不変要素が形成の重要な柱となる (Stern, 2000. p.71)。それらの感覚が他者と分化した形の自己の源となっていく。又、まとまりを持つものとして乳児の中に蓄積されていく「一般化された相互交渉に関する表象」(RIGs-Representation of Interaction that have been Generalized), あるいは2000年版序章で提唱されている「関係態」(ways-of-being-with-others) が二つの自己感に沿うように一貫して作用し、「他者とともにいる感覚」(sense of core self-with-another) があらたな間主観的自己感の土台となり、人との関係性が維持されていく。その上に言語的自己感とナラティブ自己感が重なる。そして、いったん誕生したそれらの自己感、生涯にわたって維持され (Once formed, the domains remain forever as distinct forms of experiencing social life and self.) (Stern, 2000. p.32), 互いに他の自己感と力動的に関連し続けながら、それぞれに新たな自己感の姿を創出し洗練させていく (Each simply gets more elaborated.) (Stern, 2000. p.32)。

その力動的な自己感創出のプロセスにおいて新生自己感からすでに引き出されるとする乳児・養育者の相互的な、神経発火的な「ほとぼしり」をスターンは、怒り、喜び、悲しみといったカテゴリー性の情動と区別するために生気情動 (vitality affects) という用語で表現し (They will be tentatively called *vitality affects*, to distinguish them from the traditional or Dawinian *categorical affects* of anger, joy, sadness, and so on.) (Stern, 2000. p.55), それが乳児自身の新生他者経験を促進するエネルギーとなっていく (...the amodal experince of vitality affects as well as the capacities for cross-modal matching of perceived forms would greatly enhance the infant's progress toward the experience of an emergent other.) (Stern, 2000. p.59)。そして、養育者によるその都度の適切な調律 (affect attunement) は、養育者が乳児を理解し、乳児も養育者を理解する、といった間主観的な相互感知の中で初めて実現されていく。

又、間主観的な相互交渉の中で創出されていく自己感、誕生以後に順を追って出現する感覚や知覚、知的能力などの諸能力をベースとして変化・発達する。自己感が感覚・知覚および知的諸能力の発現と連動するものであることを、スターンは具体的な乳児研究の諸知見を引用する形で例示している。2000年版序章でスターン自身が述べているように、スターンの自己感、およびその関係性の創出モデルは、1970年代以降に急速に進展した乳児研究の諸知見がその基盤となっている。

2. ワロンにおける自己・他者意識の誕生

(1) 意識の源としての情動 — 自動作用・表象的活動との相互連関的・相互対立的な関係

生れてすぐの乳児あるいは生後数ヶ月の乳児の場合、生活時間の多くを睡眠、栄養、循環、呼吸、排泄といった植物性の中枢を中心とする生理的な内部感覚あるいは内臓感覚（眠け、空腹感、満腹感など）に支配されている⁽²⁾。この時期、有機体としての機能はエネルギーの吸収が中心となる同化の相が優性となるが、その内部感覚から引き起こされた情動は、例えば「泣き」に代表されるような一定の運動となってほとぼしり、放出され、その結果、大人の養育行動が引き出されていく。又、「泣いていて、乳をやるより寝かした方が良いと思う母親は、本能的にそうするかのように、子どもを寝かしたり、ゆすったりおこしたりして、それらのうちのどの姿勢が子どもを静めるかを探るのである。これは、三半規管と迷路から来る平衡感覚や身体の移動の感覚を刺激する⁽²⁾。つまり、内部感覚によって引き出された情動は、大人の関与によって筋トーンや姿勢を中心とする自己受容性感覚（あるいは自己感覚）を刺激する働きかけにも繋がっていく。同時に乳児は、その感覚を通して新たな行動を外界に向けて放出し（遠心的方向）、その結果おこる刻々の内部感覚や自己受容性感覚の変化を引きうけていく（求心的方向）。「遠心」、「求心」の二重化された刺激の投射方向を内包しながら、乳児は日中の活動量の増加に伴い、有機体としての優勢な機能を吸収（エネルギーの吸収が中心となる同化の相）から消費（活動が中心となる異化の相）へと交替させていく。そのように複雑な生理的作用あるいは神経系の作用の真っ只中に身を置きながら、乳児は外界との諸関係をその内部に着実に積み上げていく。そして生後6ヶ月頃には、内臓の動きを含む身体の緊張や姿勢機能に繋がる形で、怒り、苦痛、悲しみ、嬉しさといった原初的かつ基本的な人間の情動が整えられていく。ワロンはこのように、外界に対して働きかける活動とは別の起源の、臓器的生活に由来するものとして情動を説明する。一方で自己受容性感覚は自分の身体の観念を形成する重要な一面をも担うものとなり⁽²⁾、情動は「緊張とともに生れる意識のもっとも原初的な萌芽」⁽⁴⁾ になっている。

情動がひとつの組織された反応体系を持ち、その発現を支配する中枢を神経系の中に持つ⁽²⁾ものであるなら、それが日常的な活動に対してどのような役割を持つものなのかが問われてくる。ワロンは、情動が、外界と有効に交渉するための二つの活動と対立すると説明する。ひとつは、適切な運動や移動などの状況に適応するための自動作用であり、もうひとつは表象活動である。情動はそのいずれの活動とも「相互に排斥し合い交代し合うもの」⁽²⁾となる。

例えば、情動が優性になると自動作用（運動）は「いたく乱され、あるいは全く消滅し」⁽²⁾、身動きが取れない状態に陥る。つまり、感覚から出発して、一定の動きを引き出した情動は、同時に運動を抑制する形で二重化された役割を担っていくことになる。

そして、一方で情動は姿勢機能と密接に繋がりを持つが故に塑型的な姿を持つことにもなる。ワロンは待機を例に取り、待機によって引き起こされた感受性は、襲う、逃げるなどの自動作用的活動の中に解消される場合と、自動作用が抑制されて、内臓系の緊張収縮や毛を逆立てる、ふるえるなどの事態を引き起こす場合があり、直接役立つ自動作用的な活動よりも（後者の）表情身振りの方が勝っている場合があるとしている。表情身振りを通して「子どもは自分自身の感覚を学ぶと共にそれらを刺激した周囲の人々、彼に影響を与えた人々の何たるかを学ぶ」のだという⁽²⁾。情動によって引き出された身体的あるいは塑型的な形象性（「姿勢活動」⁽²⁾に近いもの）が外界に放出されて、社会的かつ伝搬的な意味を帯びはじめ、それがさらに他者との接

点を生み出すことになる。そして接点を重ねることによって、形象性はさらにある種の普遍性を含みこみ、表象への準備が形成されてくる。しかしここにおいても、情動はもうひとつの活動である表象活動とも対立していく（「情動は自動作用と表象の活動を押えてのみ発現」し「運動と表象のいずれとも情動は対立的」⁽²⁾になる）。運動を起そうとする、あるいは思考に向かおうとする、そのいずれの時においても、情動はそれらへの契機と結びつきながら同時に抑制されていくのである。

つまり、情動と自動作用（運動）は相互対立的な拮抗的關係を作り出し、さらに、表象は自動作用（運動）と情動とも決別した形で飛躍を遂げて行く事になる⁽⁵⁾。ワロンのいう意識の根源としての情動はそのような側面をもつものとして理解される。

(2) 自己と他者 — 二重化されていく意識・その決別・その抱え込み

ワロンは、いくつかの論文の中で自己と他者の関係について言及している。他者との最初の関係は胎児期を出発点とする母子間の共生であり、「生物学的に完全に依存した」⁽⁶⁾状態で、機能的にはほぼ完全な同化の相である。乳児はこの生理的共生を出発点とし、運動的衝動性の段階を経て、情動が整う生後6ヶ月頃から周囲の他者と「情緒的共鳴によって溶け合う」⁽⁷⁾情動的段階⁽⁷⁾に入っていく。この段階の子どものパーソナリティは、自分に触れるものすべてのものの中に拡散している主観的癒合 (synchrétisme subjectif) の時期で、周囲との、その相互浸透が子どもの感受性を豊かにする効果をもたらしていく。しかし過緊張になると、情動は運動的衝動に戻り、むしろ情動は切断される。情動の持続において過緊張は抑制されなければならないのである。

そして、感覚運動的活動の段階である生後1年頃に、この相互浸透状態の子どもの自我（真の情緒的共生状態）は「ある矛盾を抱えるようになる」⁽⁷⁾。自分の予期や意図と実際の結果とのあいだの不調和に気が始めるのである。子どもは、交代やりとり遊びを繰り返しながら、その不調和を探索し始める。交代やりとり遊びに潜む能動的なものと受動的なものを吟味し、「する者とされる者の二つの役割を演じ…子どもは最後に相手の人格、他者の人格を発見し…それまで未分化であった自分自身の感受性の内部に他者性 (l'alterité) を認識していく」⁽⁷⁾。つまり不調和を契機として、最初の他者意識が自己意識に重なりながら、二重化されて出現してくる。2歳になっても自我は他者で補完されなければならない⁽⁷⁾が、その頃芽生える自我欲求と衝突する形で子どもはやがて自分の立場を主張するようになる。この頃になると言語に代表される表象活動はますます活発になり、子どもは自我を他者から切り離しながらそれを「第2の自我」として抱え込み始める。「それは、自我の分身であり、自我と共存し、自我と切り離しては考えられないもの（だが）…いつも自我に一致するわけでは」なく、むしろ一致しない事が心の内で議論の支えになっていく⁽⁷⁾。そして、子どもが自分の中に内なる他者を見出していくのは、身近な人たちが堅固な不動性を持っているからだとワロンは主張する。又、ワロンのいう内なる他者の抱えこみには、情動を抑制して発現する、さらに高次の表象能力が大きく関与してくることは疑い得ない事である。そして情動は、「社会的環境からもたらされる刺激の影響をも受け発展し分化し…臓器的反応の方は従となり、演動的なものになっていき…内面的なものになっていく」⁽²⁾。そして、自己は見る者と見られる者に二重化にされていく。ワロンは自己のこの二重化を、情動が人間らしい姿を持つもの事と重ねながら論じている。表象に裏付けされながら自己意識を確かなものとし、他者との出会いを自己に内面化していくとするこのプロセスは、

子どもの自我意識の深化を考える際に、極めて重要なプロセスなのではないかと思う。

以上の二つの論考を踏まえながら、具体的な子どものエピソードを次に考えてみたい。

II 日常のエピソードから考える ― 乳児期から3歳後半児に見る自己・他者意識 ―

1. 「いつもと違う…」

Dちゃん。生後6ヶ月。母親に抱かれて私と対面。母親が「待っててね」と言い置いて布団にDちゃんを寝かせ、車に荷物を取りに行く。途端に‘フンフン…’と泣きそうになる。なんとかなだめようと抱き上げると、全身に力を込め、やや反りかえるような体勢になる。できるだけ顔を見せない様に外向けに抱きながらあやしていると、Dちゃんは前方の壁にある鏡を見ている。鏡にある自分の像と私の像とを繰り返し交互に見る。しかし、鏡を見て私を振りかえることはない。時々私が‘Dちゃん’と声をかけると、抱いている私の方を振り向こうとする。振り向きざまに少し笑う。足をピンと伸ばし、全身をカチッとさせている。抱いている手にDちゃんの緊張が伝わってくる。緊張を和らげるために、鏡が見えないようにDちゃんを背後から支えて床に座らせ、母親を待つことにする。しばらくして階段を上る足音がする。すると途端に‘フンフン…’と身を乗り出して息が荒くなる。母の姿を見て両手を広げ、今にも泣き出しそう。母に抱かれて、泣くような笑うような表情をし、やがて笑顔になる。私もほっとする。

これは日常的によく見かけるエピソードである。一般的には、やや早めに「人見知り」が始まった、あるいは人を見分け始めたと解釈されることが多い。場合によっては、人になじみにくい、困った行為として受け止められるかもしれない。この情景を自我発達の視点から考えると、次のような局面が見えてくる。

ワロンに拠ると、生後6ヶ月には基本的な情動の分化が進み、乳児は「人との関係に生きはじめる」⁽⁹⁾。この時期は『情緒的共生』(symbiose affective)⁽⁸⁾と呼ばれ、他者と自分とが癒合している時期である。その時期にあるDちゃんは私(筆者)に抱かれた瞬間、いつもとは異なる感覚を感じたのである。カチッとした全身的な緊張からDちゃんの違和感が伝わってくる。ワロンのいう対時の感覚(「他人の存在や接近に応じて警戒的にある態度をとる反応に関する感覚」⁽²⁾)が呼び起こされたのだと思う。その状況をなんとか打開しようとして、名前を呼ぶ。しかし、その事がさらに複雑な反応を呼び起こしてしまう。Dちゃんの耳は、否応なくその声を捉えて応答しようとする。一方で身体が感知している違和感がある。融合しようとする衝動とそこから身体を引き離そうとする反応の、合い矛盾する引き合いの中でDちゃんの情動はさらに揺さぶられ、「不安げな半泣き」と「かぼそい笑い」が交錯する。情動は、やがて一定の閾値を越えると解消の手段を求めざるを得ない。大泣きによる解消か、なじみの大人に受け止められるか。Dちゃんは、母に抱かれてなんとか波立つ情動を静めていく。

普段から子どもは複数の大人に囲まれて成長する。身体がなじんだ感覚がさまざまな変化に晒される事は避けようがない。同じ養育者であっても、その関わりが同じになる事はあり得ない。それらの変化は紛れもなく、子どもの内部に波及していく。又、予期する反応が得られないと、はしゃぎの興奮は一気に激しい泣きが変わる⁽²⁾。そのような、合い矛盾する情動の引き合

いが子どもの身体を外界に拓いて行くのではないか。引き起こされる「過緊張」とそのつどの「解消」を繰り返しながら、子どもは自分の身体を癒合状態から引き剥がし、徐々に社会的なるものに拓いていく。ワロンの論考からは、そのようなエピソードとして解釈される。

この情景は、スターンのいう「自己——主体性」あるいは「自己——一貫性」ともつながる事柄でもある。外界世界から受け取る事柄がいつもとは異なるものとして乳児自身が感じる時、乳児の「自己——一貫性」と「自己——連続性」は揺さぶりをかけられる。違和感へのその反応が大人の調整を誘い、新たな間主観的な関わりが契機が作られていく。同時に、なじみの感覚もある。違和感に入れ替わる形なじみの感覚が、中核自己感をさらに確実なものにしていく。それは、RIGsのようなメモリーシステムを使って自己不変要素に関わる事柄を流動的かつ力動的なやり方でオーガナイズし直し、自己体験のネットワークを成長させていく (an episodic memory system ...that it permits the indexing and reindexing and the organizing and reorganizing of memorial events about self-invariants (or other invariants in a fluid and dynamic fation. p.98 (1)) からである。それは中核自己感にまとまりをもたらし、乳児は大きな飛躍を遂げる事となる (the integrating processes reflected in episodic memory advance far enough, that the infant will make a quantum leap and create an organizing subjective perspective that can be called a sense of a core self.) (Stern, 2000. p.98))。

以上の議論を踏まえると、一般的には、他者に対して自己を閉ざしてしまうかのような捉え方をされがちな「人見知り」は、むしろ積極的に自己に向かう行為のひとつなのだと思えた方がこの場合のDちゃんの姿に近い。身体的な感覚が否応なく「他者」を捕らえてしまうために「自己」への感覚が開かれていく。それが「人見知り」と呼ばれる現象なのではないかと思う。だからこそ、それがさらに新たな間主観的な関係の形成にも繋がっていくのであろう。そして「慣れ親しんだ」感覚と「いつもとは違う」感覚の、ほどほどの交替が新たな自己感の創出に繋がっていくと考えることができる。

2. 「他者」をなぞる ——「母」の取りこみ——

筆者に見方の問い直しを迫った一人にEちゃんがいる。Eちゃんは、医療機関で自閉性障害の疑いを指摘され、2歳直前に療育機関に来た。初回の様子は、周囲の人に無関心で、話し掛けに応答することが難しく、話し言葉はまだない。発達の確認を一通り終えてから、グループ活動に参加する事になり、筆者はEちゃんの言語領域の療育担当者となった。Eちゃんは、コミュニケーション上の問題だけではなく、周囲の事物を象徴的に用いる事においても難しさを見せ、玩具にもあまり興味を示さなかった。療育開始当初は、遙か遠くを見るような目線で窓の外を眺める事と、母親たちが車座になって話し合いをする、その円の真ん中に座って自分の身体を上手に回転させながら母親たちの輪をなんとなく眺める事が好きだった。そのEちゃんが、療育開始から6ヶ月以上経った頃、グループ活動で次のような様子を見せた。

普段からオモチャにはほとんど興味を示さなかったEちゃんが、いつしか同じオモチャを手にするようになりました。押して動かすと、柄の先にある小さなドーム状の空間の中で、中のボールがぼんぼん音と一緒に弾む仕掛けになっている手押しオモチャです。歩き始めの子どもが両手で押して楽しむ「カタカタ」の片手版といったものに似て

います。それが大変気に入った様で、必ずそれを手に取る様になりました。最初は友達に取られても、表情をあまり変えなかったのですが、その内、同じものを欲しがる友達と取り合いをしてまで離さなくなりました。今まで友達にはあまり関心を示さなかったEちゃんが友達とはじめて取り合いをしたよ、と喜んだものです。ある日の事です。Eちゃんは、そのオモチャを押しながら、いつものように満足げな顔で部屋を一回りした後、オモチャの先を窓のカーテンに当て始めました。何度も何度も当てています。不思議な光景でした。それまでのEちゃんとは明らかに違う動きです。お母さんたちと話し合いを続けながら、私〈筆者〉の目はEちゃんの動きに釘付けになりました。やっぱり気になって私は思わず「Eちゃん、一体何をしてるのかしらね」と思わずつぶやくと、Eちゃんのお母さんは「あっ」と絶句し、笑いながら「私の真似かもしれない」と言うのです。訳を聞くと、Eちゃんのお母さんは掃除の時、よくカーテンに掃除機を当て、なぞりながら埃を吸い取るのだそうです。そう言われてみれば、確かにそのオモチャは形といい動きといい、掃除機のイメージにぴったりです。お母さんの話を聞いて、初めてEちゃんの執着がわかったような気がしました。Eちゃんにすれば、それ以外のオモチャでは代用し得なかったのです。そして一連の行為が一定の「イメージ」に支えられた活動であった事に初めて気付かされました。

この場面は、Eちゃんが玩具に関心を見せ始めた事、取り合いをしてまで離さなくなった事、取り合いを契機に友達にも関心が向かうかもしれないと判断した事、そのいずれにおいても、表象に結びつく事柄とは考えていなかった場面である。特定の玩具への執着を、単に「こだわり」と考えても疑問に思わなかったろう。表象の立ち上がりをあらためて考えさせられた情景である。ワロンとスターンは表象をどの様なものとして説明しているのだろうか。

ワロンは情動と拮抗するものとして表象を位置づけ、その表象への移行に模倣を置く⁽⁵⁾。ワロンは表象への移行を主テーマとした著⁽¹⁰⁾の中で、情動に結びつきながら身体が作り出す多様な塑型性を詳細に論じている(本稿Iで少し触れた)。身体的な塑型性の中で表象に最も近い形を模倣とする。つまり、ワロンは表象を、身体的な通路を主軸にしながら情動と拮抗していく姿勢的な緊張として論じる。それは身体的なるものに深く根ざしている表象である。

一方スターンは、他者との間主観的な交流体験をエピソードとして抱え込むRIGs(一般化された相互交渉の表象。例えば、抱かれた時のさまざまな感覚、いないいないバーなどのゲームをしている時に起こった感覚や情動、それら前言語的なエピソードを抽象化し、平均化し、表象し、RIGsとして抱え込む)を中核自己感の基礎におく。ここで、スターンとワロンの説明からEちゃんの情景を再考してみたい。

療育開始時の母親の話によると、誕生以来、母親はいつもEちゃんのすぐそばにいた。身辺の世話のもとより、積極的にEちゃんに遊びをしかけ、話しかけ、又、Eちゃんの気持ち安定する方法も母親が一番よく分かっている。Eちゃんは、療育初回から母親の居場所を目で確認し、帰る時は母親の手を必ず握る。Eちゃんにとって母親は特別な存在である事ははっきり見て取れる。そのような親子の様子から察すると、Eちゃんの母親像は、食事の介助をし、衣服を替え、時には歌を歌い、話しかけ、不安な時も必ずそこにいる〈なじみの人〉である。日常の諸状況の中で展開された間主観的な関係の蓄積が、先ず母親像の総体となって、Eちゃん

の内部に抱え込まれたのではないか。その母親が、毎日面白いモノ（掃除機）を操作する。一般的には、それらのRIGsと‘まま’などの言語表現が結びつき、さらに明確に母親を特定していくのであろう。Eちゃんの場合は、掃除機と一体化する形で母親のRIGs、あるいは母親のイメージを特定したのではないか。

そのように考えると、イメージの世界が広がりにくかったEちゃんが、いつの間にか、一番身近な他者（母親）を自分の中に取り込み始めていた可能性が出てくる。それが大変静かな取りこみであったために、担当者（筆者）はこの時まで取り合いの本質的な意味に気づくことができなかった。友達に注目し始めたときと喜んだオモチャの取り合いは、実はEちゃんには必然の事であり、他のものでは代用できない、一定のイメージを含んだ切実なものだったのである。Eちゃんの必死さが具体的なオモチャに支えられていたために、この情景は、一見するとオモチャへの「こだわり」に見えてしまう。しかしEちゃんの本래の「こだわり」は、外からは見えにくい母親のイメージの抱え込みを保持しようとする事へのこだわりだったのではなかったか。取り返したかったのは、オモチャではなく、中断されてしまったそのイメージだったのではないか。だから、代用品では納得しない。代用は無理だったのである。

Eちゃんが見せたこの取り合い場面は、Eちゃん自身の2つの発達の局面を浮き彫りにする。一つは、他のものでは代用し得ない程、「取りこむ」対象世界が限定的で事物の対象化が弱い、いわば発達課題としての局面であり、もう一つは表象世界に拓かれ得る可能性を秘めた、到達の意味合いを持つ局面である。先に述べたように、表象は情動と拮抗する形で立ち上がるとするワロンに拠るなら、Eちゃんの静かな「取りこみ」は情動が抑制された結果であったのかもしれない。しかし一方、「自動作用と表象がなかなかできないときには情動が襲ってくる」⁽²⁾事を考えると、Eちゃんの初期段階のこの表象が状況次第では一挙に情動—あるいは衝動にまで行き着く事もあり得る—の世界に置き換わる危うさをも持つものである事も確かである。取り込みの静かさと取り合いの激しさが同居している状況である。発達初期の表象が情動と深くからまりながら、「自己」に帰着する事と背中合わせで進行する事柄であることをあらためて知らされる。

模倣の前提にはイメージを内包する表象機能が必要であるとワロンは指摘する。Eちゃんのように、自閉症スペクトラムの範疇にある子どもにとって、模倣が難しいとされる要因の一つは表象機能の育ちにくさが関連していると考えられている。しかしEちゃんが見せた一連の行為を辿ってみると、そこには表象の芽生えが静かに潜行し、それが〈なぞり〉という模倣的形態で唐突に表出される可能性は否定できないのである。ただ、抱え込まれた表象が特定のモノと結びついて表出されるために、「こだわり」と解釈されてしまう。限局的な状態にある表象が「こだわり」なのかもしれないが、こだわる姿の中に表象の萌芽を見るかどうかは大きな違いである。「こだわり」の中に表象が潜行している可能性はないかどうかを慎重に判断していく必要がある。

Eちゃんは、それからさらに数ヶ月後の3歳直前に、母親が鳩を見て「ぼっぼちゃんだねー」と話しかけると、突然「ハト…」とつぶやいて母親を驚かせている。「ハト」と教えた事はないのに、と母親を不思議がらせたそのつぶやきがEちゃんの初語であった。Eちゃんの「取りこみ」がいかに静かなものであるか、その特徴は初語の様子にも反映している。

3. 「他者」と「自己」との間を往来する

26歳の母親が寄せた新聞の投書記事に、次のようなエピソードがあった。Eちゃんの発達課題でもあった表象の広がりを端的に伝えてくれるエピソードとして紹介したい。

『言葉をまねる息子——3歳になる息子はいろんな言葉を吸収中。昼間はずーっと母親の私と一緒にのに、出てくる言葉は父親そっくり。昼ごはんをつくっていると「おい！メシまだか？」「チャチャッと作れよ」などと言いだした。「はあ？」と驚いたが、言葉を訂正させても本人は何もわかっていない。夫が帰宅したら早速その話しをして、子どもの前では言葉遣いに気をつけようということになった。さらに驚いたのは、私に言うのは夫そっくりで、夫に言うのは私にそっくりなのだ。夕飯で夫が「ほら、残さずに食べなさい」と言えば、「食べながらしゃべらないの！」と言う。あきらかにこれは、私がお飯中に毎日息子に言っていること。追い打ちをかけるように「そうやってしゃべっているから、遅いのよ」と言いだした。顔やお腹の具合に加え、態度も父親に似てきた。テレビを見る時は寝転んで、ご飯を食べるときはお茶をたくさん飲む。注意すれば「だって、パパもしてるもん」と返事をする。なにかと「だって」が付いてきて腹が立つが、息子は悪くない。夫が帰ってきてからすべてを吐き出して注意すると「こんなうるさい家には帰りたくない」と言いだす。父親のまねをするんだから、少しは気をつけてね。』

好きなキャラクターになりきって「～ごっこ」に没頭する子どもは、憧れの対象を丸ごと自分の中に投影している姿である。投書の3歳児も、身近な複数の他者を何の矛盾も迷いもなく、時に周囲に小さな波を起ししながら抱え込み、表現する。日常生活によくある微笑ましい情景である。しかし投書の3歳児は、他者になりきりながらも、一方で自分はパパやママ（他者）ではない事も充分認識していて、形勢が悪くなると「だって、パパだってしてるもん」と他者を瞬時に対象化し、たちまち今度は「自己」を前面に出す。状況に応じて複数の他者を頻繁に出入りさせ、その振る舞いを模写しながらも、揺るぎなく「自分は自分」である。このような他者表象の広がりには、他者と自己を同時に対象化する作業が不可欠である。そして、ワロンが述べる様に、取りこむ他者が身近な他者であることは重要な事なのであろうと思う。時代と連動する社会の中で、その時代を生きる身近な大人をなぞりながら、子どもはそれぞれの「場」における振る舞いをわがものとしていく。そう考えると、ワロンの言う混交状態からの自他分化の作業は、単に自他‘分離’の作業に留まらないのかもしれない。投書の夫婦が「子どもの前ではことば使いに気をつけよう」と確認し合ったように、「なぞる」行為は「なぞられる」側の大人のあり様を対象化する行為ともなるようである。その意味において、自他‘分離’の作業は社会・文化的な要素を色濃く内包して進行する、極めて社会的な作業なのだとも言える。

4. 「他者」と「自分」との関係やつながりを逡巡する

投書の3歳児は、他者のふるまいを外形的、形象的になぞる形で他者を投影し、複数の「他者」と「自己」間を自在に往来して見せたが、「自己」を形成するには、他者の内面をも捉えたさらに深い他者性の抱えこみが必要なのではないかと思う。その際、情動は抑制的に作用する。そのプロセスを経て子どもは徐々に自己の内面に辿りつく。その道筋を次のエピソードから考えてみたい。保育園に通う3歳10ヶ月の女兒、Fちゃん。対話しながら、言語発達調査（質問

者は筆者)の質問に答えてもらっている。

私：「では、『い』で始まることばを二つ言ってください。

Fちゃん：いす…(その後しばらく考える)

私：そうね いす。そう、そう。(間を置いて)それから？

Fちゃん：……………(小声で) ない

私：そう…大丈夫よ。では『か』のつくことばを二つ言ってください。

Fちゃん：(元気に) かめー。

私：そうーそうねー。…それから？

Fちゃん：(さらに元気に) かっち！

私：(あまりにも弾むような自信に溢れた発言だったので、私は思わず)かっち？ かっちって？

Fちゃん：しんゆう！

私：そうー かっちって Fちゃんの親友なのー、そうか、そうか…(と聞いてから、次の課題に移ろうとすると)

Fちゃん：うーん、(と考え出す。そして独り言でもつぶやく様に)かっちはしんゆうかなー ……ともだちかなー ……(と真剣に考え始める)

Fちゃんがあまりにも真剣だったので、調査を外れて「かっちは親友か、友達か」のFちゃんの迷いに、しばらく一緒に付き合うこととなりました。

Fちゃんは自信満々に「かっち」と叫んでから、「かっちって？」の筆者の問いに間髪をいれず「しんゆう！」と言い切った直後に、自分から立ち止まってしまった。Fちゃんは、「かっち」の自分以外の友達に対する振る舞いと、自分に対するそれとを比較し、同時に「かっち」からの振る舞いを自分がどのように感じたか思い出しながら「かっちは親友か、単なる友達か」を考え始めたのである。自分と「かっち」との関係、あるいはその相互の親密さを周辺の複数の友達だけではなく「自分」も同じ土俵に挙げて、時間を遡りながら慎重に比較し「しんゆうかなー…」とつぶやく。Fちゃんは「しんゆう」という「ことば」の使用をためらい始め、自分とかっちの関係の「実質」について逡巡する。「かっち」から見た自分の相対的な位置と、「かっち」を捉える自分の眼、その両方に対してためらう。ワロンは、社会的な一体化から自己を引き離していくプロセスを子どもの成長・発達と考えるが、Fちゃんの立ち止まりは、その辺りの説明を実証するような情景であった。「かっち」と静かに対峙しながら自己を引き離し、自己を対象化しようとする。そこには言語の駆使を前提とする認識力の総動員がある。「かっち」と対決しながら自己と対面する。Fちゃんは自己を表象し、自己を対象化しようとする。ワロンの言う、社会的な関係の中でこそ「個としての人格」が作り上げられて行く道筋をあらためてFちゃんの立ち止まりに見る思いである。

III スターンとワロンの論考を考える — その類似点と相違点

ここでは、本論文のIで取り上げたスターンとワロンの論考に関して、それぞれの論考の根幹ともなる乳児像の捉え方、および、両者の時代性からも切り離せない関係性の捉え方、そし

て自己感や自己の対象化に関わる表象の問題の、三つの観点からその特徴を考えてみたい。

(1) 乳児像の捉え方

スターンは、誕生直後（あるいは胎児期）から出現しつつある乳児の新しい感覚や感情などの個としての能力が自己感の基礎になるとし、それらの具体例を発達諸研究に基づく被観察乳児 (observational infant) から提示する。精神分析理論の臨床家たちが古い乳児像に基づき、推論による跳躍の基に作り上げたストーリーのある臨床乳児 (clinical infant) は、乳児研究を意図した構造化された実験室の被観察乳児 (observational infant) とは大きく異なることを指摘しつつ、同時に、被観察乳児がデータに基づいてはいるものの、生きた乳児像にはなりにくいことも指摘する。スターンは、データに基づいた被観察乳児と、主観的生活に息吹を吹き込む臨床乳児の統合を提案する (Both of these approaches are indispensable for the present task of thinking about the development of the infant's sense of self. The clinical infant breathes subjective life into the observed infant, while the observed infant points toward the general theories upon which one can build the inferred subjective life of the clinical infant.) (Stern, 2000. p.14)。

そして、スターンの自己感創出に登場するストーリーのある乳児は、一貫して、誕生直後から他者と融合することなく、他者とは分化した形で存在する「個」としての乳児である (Infants begin to experience a sense of an emergent self from birth. They are pre-designed to be aware of self-organizing processes. They never experience a period of total self/other undifferentiation. There is no confusion between self and other in the beginning or at any point during infancy.) (Stern, 2000. p.10)。この点は、本稿の I-2 で述べたような、他者と癒合する形で生きるとするワロンの乳児像とは根本的に異なるもので、両者の見方が明確に分かれる点である。この両者の、乳児像の捉え方の違いが、関係性の形成を詳細に論じるスターンの「自己感」論と、情動を中心とする身体的なるものを重視するワロンの自我意識形成論の、二つの方向に議論が発展する契機になったのではないかと考えられるのである。それは又、関係性の捉え方そのものの相違にも繋がっていく。

(2) 関係性の捉え方

ワロンは、他者との関係を前提にして生きる社会的なる者としての乳幼児固有の特徴を重要視する。スターンにおいても、関係性は自己感創出の基本となる概念である。社会的な関係性を重視する点で両者の論考は類似しており、又、重なる部分も少なくない。しかし、両者が提唱する関係性の中身は同じものだろうか。少なからず異なるように思えるのである。ワロンにおいては、大人が子どもの様子を察して、専ら子ども側に働きかけていく関係性が議論の中心であり、そこで生じる情動的な諸変化は、あくまでも子ども自身の身体へと向かうものである。子どもが意図的かつ積極的に大人に働きかけていく関係性については、1歳前後に始まるとする交替やりとりあそびの出現まで待たなくてはならない。そのことから考えると、相互的な関係性に関する記述は、ワロンの場合、極めて少ないのではないかと思う。

一方、スターンは、先述したように、1970年代以降の乳児研究の知見に基づきながら、誕生直後から、大人と子ども双方の、相互に影響しあう間主観的な関係性が自己感創出の前提である。両者の時代的な制約も考慮しなければならないが、乳児像の捉え方の違いが関係性の捉え

方の違いにも反映していると考えられるのである。

さらに、情動を共に重要視する両者ながらも、情動とは切り離せない身体性の捉え方においても両者は微妙に異なっているように思う。ワロンは、筋トーンズなどの姿勢を通路として他者からの刺激が自己の身体（内部感覚、外受容感覚、とりわけ姿勢などの自己受容感覚）に向かう感覚を重要視する。一方、スターンは視覚・聴覚などの遠受容感覚を間主観的な関係性構築の通路として重要視する。スターンが口唇に代表される、身体的なるものへの言及を控えたのは、それらが精神分析理論の中で重視され過ぎたためだとスターン自身が述べているように、自己受容感覚や近受容感覚などの身体的な間主観的な関係についてはあまり言及していないのである。

つまり、ワロンは身体的なるものを重視しながらも相互的な身体間相互交渉については、水面下に置かれた感があり、一方、スターンは間主観的な関係性を論考の主軸としながらも、身体的なレベルにおける間主観性については、ほとんど触れていないと言える。間主観的な関係性がさらに明らかにされていくために、たとえば乳児と養育者の「抱き」に見られるような、身体的な相互交渉についての検討なども今後の課題なのではないかと思う。

(3) 表象の問題

スターンは、カテゴリー的な情動とは区別される生気情動を、乳児と養育者間の間主観的な相互感知の中で発露されてくるものとして捉える。一方、ワロンにとっての情動は、その発達論の中核に位置づく重要な視座のひとつであり、自我および人格の成り立ちにおいても、表象能力などの高次精神活動においても深く関与し続けるものとして考える。ワロンは、情動に接続している身体的な塑型性から表象の萌しを説明し、その初期的な外顯的な行為が模倣であるとする。その前駆的な、姿勢的なシグナルが自己と他者相互の注意を喚起し、意図を読み取る際の手がかりとなりうるために一定のシグナル機能を果たすとワロンは指摘する(本稿I)。ワロンは表象の出現を発達上の大きな飛躍として重要視する。スターンの視点からその点を考えると、乳児と養育者の共同的な意図理解(互いに相手が自分の意図を理解していることを理解する)ということになるのだろうか。それらは表象に繋がる事柄として多くの示唆を含んでいる。しかし、一方で、表象の発生そのものに関してワロンは説明をしているのだろうか?との疑問はどうしても残る。表象の初期形態が身体的な形を帯びるという指摘は、障害を持つ子どもの臨床場面から考えても十分に了解できる指摘である。事実、山上⁽⁹⁾は、自閉的な症状に対するワロンの視座の有効性を重視し、「状況への構えとしての姿勢活動が育ちにくい傾向が模倣や象徴機能の発達障害に連なっていくという問題は、ワロンの理論的枠組み抜きには解決していかないのではないかと指摘している。しかし、それでもなお、ワロンは表象の発生そのものを説明し尽くしてはいないように思えるのである。

一方スターンは、自己感の創出に関連してRIGsを挙げる。2000年版序章では(I have preferred to call them (RIGs) ways-of-being-with, deemphasizing the process of formation in favor of describing the lived phenomenon in a more experience-near and clinically useful way.) (Stern, 2000. p.xv) と、RIGsをways-of-being-withと置き換えながらも、乳児が間主観的な体験を抽象化し表象する能力を早期に開花させると結論づけている(The conclusion is that infants have a capacity to aggregate experiences and distill (abstract out) an averaged prototype. I suggest that when it comes to more familiar and important matters,

such as interactive experiences, the infant's ability to abstract and represent such experiences as RIGs, begins much earlier.) (Stern, 2000. p.98)。スターンはRIGsを表象に関連付けて論じているわけではないが、間主観的な関係性そのものが表象されていくとするスターンの論考は、表象のはじまりとしても注目される場所である。

おわりに

自己、あるいは自我意識に関わる二つの論考を基に、子どもが立ち止まり、つまずき、混乱する状況を含め、乳幼児が他者を体験し、「自己」を形成する様子を見てきた。子どもの発達にとって、環境としての大人の役割がいかに重要であるかは、スターンやワロンの発達観に通奏低音の様に流れている主張である。子どもはそれぞれに固有の足取りで「他者」と出会い、「自己」と出会う。大人はそれぞれの持ち味と立場で子どもと出会い、時に楽しく、時には厳しく向き合いながら、子どもの混乱を受け止め、共に考える。あるいは子ども周辺の間関係の構築を手助けする。そして時に、大人自身の振り返りを子どもから突きつけられる。いずれもごく普通の日常場面である。スターンやワロンの思索の前提には、紛れもなくそのような大人の存在がある。今日、あらためて大人の役割が問われているように思えてならない。

[引用文献]

- (1) Stern, Daniel N. (1985/2000): *The Interpersonal World of the Infant. A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. Karnac, London.
- (2) アンリ・ワロン (1965) 「児童における性格の起源」 久保田正人訳 明治図書 (Wallon, H.: *Les origines du caractère chez l'enfant—Les préludes du sentiment de personnalité—*. Presse Universitaire de France. 1949.)
- (3) 山上雅子 (1996) *物語を生きる子どもたち 自閉症児の心理療法* 創元社
- (4) 坂元忠芳 (2000) *情動と感情の教育学* 大月書店
- (5) 松井尚子 (2003) ワロンの「模倣」に果たす情動の役割 北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ紀要 教育臨床心理学研究 5
- (6) アンリ・ワロン (1983) 子どもの精神発達における運動の重要性 (『ワロン／身体・自我・社会』 浜田寿美男訳編 ミネルバ書房) (Wallon, H.: *Importance du mouvement dans le développement psychologique de l'enfant, Enfance*, 1956.)
- (7) アンリ・ワロン (1983) 自我の水準とその変動 (『ワロン／身体・自我・社会』 浜田寿美男訳編 ミネルバ書房) (Wallon, H.: *Niveaux et fluctuations du moi. L'Évolution Psychiatrique, 1*, 1956.)
- (8) アンリ・ワロン (1983) 子どもにおけるパーソナリティの発達段階 (『ワロン／身体・自我・社会』 浜田寿美男訳編 ミネルバ書房) (Wallon, H.: *Les étapes de la personnalité chez l'enfant. Le Problème des stades en psychologie de l'enfant*, Paris, P.U.F., 1956.)
- (9) アンリ・ワロン (1983) 子どもにおける社会性の発達段階 (『ワロン／身体・自我・社会』 浜田寿美男訳編 ミネルバ書房) (Wallon, H.: *Les étapes de la sociabilité chez l'enfant, L'École Librée*, 1952.)
- (10) アンリ・ワロン (1962) 認識過程の心理学——行為から思考への発展—— 滝沢武久訳 大月書店 (Wallon, H.: *De l'acte à la pensée- Essai de psychologie Comparée*, Flammarion, Paris, 1942.)